

ダッドレー書簡一訳および註(一)

若 山 晴 子

序

本稿「ダッドレー書簡一訳および註」は、紙数の都合上、ダッドレー女史の米国伝道会（アメリカン・ボード）クラーク博士宛ての書簡中、明治5年（1872）12月24日より明治10年（1877）1月1日にいたるまでのものをおさめた。すなわちダッドレー女史が、日本伝道の召命に応じ、出発に先だち、未だ本国にあって米国伝道会と連絡をとり始めた時点より、共に来日したタルカット女史との協力のもとに開校した、神戸女学院の前身である神戸山手の「寄宿学校」が順調に発展して、新校舎増築の必要の生じてきた時期までの期間である。これ以後、女史が学校を去り神戸を中心とする民間伝道に専従し始めるまでの事情を伝える書簡は、続いて発表する予定である。

ダッドレー女史の米国伝道会本部宛ての書簡は数において決して多くはない¹。本稿で扱ったおよそ4年の間に5通を残すのみである。但しそれだけに各々の書簡はかなり長文で、学校業務のことや市井の伝道活動の様子を伝えている。また、すでにタルカット女史の内に相克の様子を見た「教育」と「伝道」との二元性の問題は、ダッドレー女史にあっては、学校業務に対する己の適性への疑念——それは、市井の伝道における女史の活躍のあまりのめざましさととの対比の故かとも思われるが——からも発祥しつつあることが窺われる。

本稿のテキストおよび解説・訳・訳文に関する取扱い方は、「タルカット書簡一訳および註」（「神戸女学院大学論集」第24巻第3号、第25巻第3号）に述べられたと同一手続きによっている。史料を御提供下さった関西学院大学文学部川村大膳教授、手稿コピーの判読に協力いただいたギーゼンタナー女史（Miss Marguerite Giezantanner）に感謝申し上げる次第である。

なお、これら「宣教師文書」の取扱いについて、その当初より子細の指導を賜わり、かつ上述の「タルカット書簡一訳および註」に、執筆分担並びに検討の労をおとりいただいた本学文学部鈴木恒彌教授は、1980年7月18日長逝された。尽きざる哀悼の念を新たにしつつ、本稿が師の教導を甚しく逸脱するものではないようにと祈念するものである。

凡 例

- ☆ 書簡左肩の号数は、米国伝道会（American Board Commissioners for Foreign Mission）本部における整理番号である。発信人の書簡の数とは関係がない。
- ☆ American Board Commissioners for Foreign Missionは通例 A. B. C. F. M. と略称される。本文中では米国伝道会と訳した。但し書簡文中では簡略に Board あるいは Mission Board と記されていることが多い。Board は単に伝道会と訳出した。なお同じ文中に伝道団とあるのは mission の訳で、現地の宣教師団を指す。

- ☆ 米国伝道会年次報告 (Annual Report of the A. B. C. F. M.) の略号として A. R. を用いる。
- ☆ 米国伝道会の月刊機関誌 Missionary Herald の略号として M. H. を用いる。
- ☆ 米国伝道会の共働機関である婦人伝道会 (Woman's Board of Mission) の月刊機関誌 Life and Light for Woman の略号として L. L. を用いる。
- ☆ 「タルカット書簡一訳および註」をおさめた「神戸女学院大学論集」第24巻第3号および第25巻第3号については、以下それぞれ、「論集」XXIV-3, 「論集」XXV-3 と略記する。
- ☆ 訳出の際補足した語は [] に入れた。
- ☆ 書簡原文解説の際の判読困難の部分は, [……] で示し, 註をつけて説明した。また, 一応解説したつもりであるが場合によっては検討の余地もあるかもしれないという語句には特別な符号をつけず, 番号のみを附して註に加えた。

なお, 註の項目には「タルカット書簡」と重複するものが少なくないが, その記述に関してはなるべく前稿の補いとなり得るよう努めたつもりである。

ダッドレー書簡²（一）

1872年12月24日³～1877年1月1日⁴

訳

第69号⁵

エルギン⁶

1872年12月24日

クラーク博士⁷ 様

拝啓⁸

お便り先週拝受いたしました。わたくしはブラッチフォード夫人⁹をお訪ねして戻ったばかりのところでございます。シカゴ¹⁰ではハンフィ氏¹¹にもお目にかかりました。お二方からわたくしの旅に必要な準備につきましてお教えいただきました。エドワーズ夫人¹²のお宅とは5マイルしか距たっておりませんから、旅仕度に関しまして¹³、夫人に御相談申し上げることになりましょう。貴信頂戴いたします前にハンフィ氏より5ドルいただきました。氏はまた、残金を請求するようにもおっしゃって下さいました。これはいづれにせよわたくしの貸方に記入されるものと思っております。わたくしは、わたくしの友でありまた賢明な助言者でありました、おじの〔……〕¹⁴ クラーク牧師の告別に招かれました。おばは子供もなくとり残され、数週間ほどはわたくしがそばに居ることが必要のように見受けられます。ブラッチフォード夫人は、こういう事情であることを〔……〕¹⁵して友人たちに任せるのが、わたくしにとって最善であるとお考えでいらっしゃいます。わたくしは3月1日までに出かけられますよう願っております。

わたくしには一人の友人がございます。まじめなクリスチャンで、このような問題を熟慮している経験豊かな教師でございまして、行く決心をしてくれるかもしれないと期待しております。すぐにわかるとよろしいのですけれども。

敬具〔真心をこめて〕¹⁶

ジュリア・E. ダッドレー

—返信〔……〕¹⁷—

I am so much interested in
 the work and would like to see some of
 them. I have been very busy but
 as time will come I will
 see you at a place or rather to a
 garden. I wish to know you can
 come. I shall go at a good
 and see you and shall be
 glad I think to come some place
 to see you home. I have been
 for half a dozen years while
 waiting for you. I hope to know
 you well. I will tell you I am
 happy and enjoy my work. I
 am a student of the school and
 I am very interested with a help
 Miss. I shall see the other
 workers here and better than all
 the things in the world. I have
 an early and I am not back
 at home. I only the woman know half the
 things of working here. I have
 been for years but it is well. I hope to
 see you. I have been
 very truly
 J. P. D.

twice every day while there
wept and would have come with
me. To be able now to put one
or two well trained women
in such a place would be a
greater benefit than we can cal-
culate. I shall go up again
next month and shall in the
fall I think contrive some plan
to make a home large enough
for half a dozen girls while
waiting for one we hope to have.

I need not tell you I am
happy and enjoy my work. I
need wisdom to plan and strength
to carry out but with a helper as
Miss Talcott and the other dear
workers here and better than all
the strength and wisdom which
are surely ours we need not lack.

at home

If only the women ^ know half the
delights of working here hundreds would
beseige you but it is well then do not.
We want helpers however.

Yours very truly, J. E. Dudley.

クラーク牧師様²⁰

辺境の新しい町よりお便りいたします。ここでわたくしは、長旅前の数日間を、わたくしの兄弟たちと共にすごしております。お送りいただきました書き込み用紙に記入いたしましたので、本便に同封送附申し上げます。全ての手はずが整い、ほっといたしました。本当に、神様はわたくしのためにこの道筋をととてもたやすいものにして下さっておいでのように思われます。わたくしは当地で、中国伝道の持ち場にお戻りになるエピスコパル・ボードのホイト氏（御家族連れ）²¹の知遇を得ております。わたくしにとりまして、道すがらずっと、愉快的連れとなつて下さいましょう。わたくしはイリノイにおける最後の晩をセミナー²²ですごしました。そして、デイヴィス氏²³宛てに、ダコタ伝道団の旧友でいらっしゃるリグス氏²⁴と御子息とから、この会合に寄せられましたたくさんのお言伝をいただいております。

タルカット女史²⁵からのお便りを今朝いただきました。あの方は現在オークランドにいらっしゃるようでございます。わたくしはなお、わたくしの友人が日本の宣教師としてその身を捧げる決意をしてくれまますようにと期待し、かつ一層の奨励をいたしております。この方にとりましては、来秋より早く出発することは不可能でございましょうけれども。

わたくしは自分の写真を携えてはおりませんが、すぐにエルギンから送ってもらうようにいたします。

激励や好意のお言葉に感謝申し上げます。わたくしは、地上の小暗い地域にキリストが到来なさるよう望んでおいでの皆様のお祈りを身に受けておりますことを知り、わたくし共の活動のために一層強くなっております。

さほどの年を経ずに日本でお目を見することを期待してはなりませんでしょうか。そうあってほしいと願っております。そして先生が、御自身のお骨折りとわたくし共のそれとが空しくはなかったということを、お認め下さいますように、と。

敬具〔真に衷心から〕²⁶

ジュリア・E. ダッドレー

—本部着2月20日—

1874年 6月20日

クラーク博士様

拝啓²⁸

久しく御無沙汰申し上げてしまいましたことを痛感いたしております。これからはもっときちんといたしましょうとお約束いたします以外に弁解の言葉はございません。本当に、わたくしは一年の余も日本に滞在していたことでございました。新奇な光景や物音が心安い²⁹ものとなり³⁰、わたくしは、改めて、土地の雰囲気や人ひとりびとりに愛着を持つようになってきております。これは当地では異なことではございません。この国はいかにも美しく、またわたくしはこの人びとを愛しておりますので、批評するには適任ではございません。

どなたでしたか、この人びとのことを、彼らは最も礼儀正しく親切かつ高潔である——と書いておいでなのを³¹、わたくし、かつて見ましたが、この賞讃は当を得ていると存じます。この人びとは、ただ、宗教を必要としておりまして、わたくし共がやって参りましたのも、この人びとにそれを教えてその霊的本性を生かし³²、この人びとが立派なものをどっさり得ますようその特性に活力を与えるためでございました。

この一年は忙しいものでございました。第一に、わたくし共は勉強に打ちこんでおります。それから、昨年10月に小さな学校を開きました³³。これは、年長の生徒たち（ほとんどが既婚婦人でございます）の出席が不規則なのですが、全部で30名位を数えるかと存じます。わたくし共はしばしば生徒たちの家庭を訪れ、友人の数に入れられるようになりました。わたくしは、この数箇月、[……]³⁴と一緒に聖書を少々読むことができました。何軒かの家庭では家族も一緒に読んでおります³⁵。

わたくしの携わっておりますのは実に楽しい仕事でございます。わたくしはいつも、話をきいてやろうという好意と志とに出会い、時には、人生の道を尋ねようという切望に接しました……。当地では、婦人たちを捜しにゆかねばなりません。この人たちは、わたくし共が出向いていって説き伏せませんと、決して出ては参りません。それと申しますのもこの人たちにとりましては、人前で公然と男の方と会合を持つということは、お国ぶりに叶わぬことでございますから。もっともこれにつきましてはさほどの障害はなさそうでございます。婦人に敬意³⁶を表するにつきまして、日本男子にはかなり生得的な慰懃さがございますから、教育がもっと普及して、婦人がその感化力を善用するようになりました時には、力のあることでございましょう。そしてわたくしは、その日の遠くないことを願っております。

わたくし共が当地におきまして早急にホーム³⁷を必要としておりますことにつきましては、幾分かそれとなく仄めかされていらっしゃるかと存じます³⁸。わたくし個人といたしましては急^せいてはおりません。わたくしは当地におきまして、デイヴィス氏御夫妻と共に暮しておりますこの家³⁹と同じような風の家を、他に見い出すことは決してございませんでしょうし、ま

たそれならば、家々を訪問するというわたくしの大好きな活動を縮小しなければならないでしょうということを、自覚いたしております。けれどもこれに逆らいはいたしません。わたくしは、少女たちが一層直接的な感化に与れますようなホームが早急に必要であることに、疑念を持ってはおりません。三田での活動⁴⁰に関しましては、常々便りをお受け取りのことと存じます。数週間前、わたくしは10日ばかりをあちらで、わたくし共の友なる大名の御母堂⁴¹とわたくしの先生と共にすごしました。たくさんの人が聞きに参りました。時には100人以上の出席がございました。

わたくしは、神の霊がそこに在^{いま}し、「私は生きており、全ての者は膝をかがめるであろう」⁴²とおっしゃった方への知られざる感化力に、靈魂たちが「大いに」⁴³引きつけられたことを確信いたしております。デイヴィス氏は先週の土曜日においでになり、40人ほどが聴聞に参りました。本日はどしゃ降りの雨の中を、わたくしの先生が、明日三田在の予定でお出かけになりました。若いクリスチャンたちがこれほど働く気になっておりますのを目にいたしますのは、すばらしいことでございます。必ずやこの国は、間もなく、たくさんの子を「主の道」における指導者や教師として擁することになりましょう。わたくしが三田から戻りました時、二、三の母親がわたくしに申しました——自分の娘たちをあなたに連れて行ってもらいたい、そして自分にできるよりもよく、娘たちを教え導いてほしい——と。また、該地滞在中^ひに二度会ってりました少女たちは、泣いて、わたくしについて来ようとさえいたしました。今、一、二名の充分に鍊達した婦人をこのような土地に送りこむことが叶いましたら、わたくし共の計算を超えた大いなる益となりましょう。わたくしは来月再び出かけてまいります。そして秋には、多分、わたくし共の望んでおりますもの⁴⁴の実現を待望しつつ、6名の少女たちに事足りる大きさのホームを作るために計画を練ることになると存じます⁴⁵。

わたくしが幸せで、自分の仕事にいそしんでおりますことは、申し上げるまでもないことでございます。わたくしは、企画するために智慧を、実行するために力を、必要としております。けれども当地では、タルカット女史のような協力者や他の親愛なる働き人方^{びと}と共に在り、またそれら全てに勝^{まさ}って、間違いなく⁴⁶わたくし共のものなる力と智慧と共に在り、わたくし共は欠乏とは無縁でございます。

もしも家庭に在ります婦人たちが当地で働くことの喜びの半分でも知りましたら、何百人もが⁴⁷先生のもとに殺到することございましょう。それには及びませんけれども。とは申しますものの、わたくし共、助力者が欲しいでございます。

敬具「真に衷心から」⁴⁸

J. E. ダッドレー

—本部着 7月20日—

1876年3月20日

クラーク博士様⁴⁹

わたくしは常々、先生は日本からの便りをずい分たくさんお受け取りのこと故、わたくしのものなどなくもがな——と思っておりました。けれども只今は、わたくしの従妹バロウズ女史⁵⁰の来日ということにとてもびっくりし、また大喜びいたしましたあまり、女史をお遣わし下さいました方々に御礼申し上げるのが、わたくしにできますせめてものこと——という気になっております。わたくしはこのことを、わたくしが家を離れましてよりのこの数年大層ねんごろにわたくしをお導き下さいました天父からの特別の賜として、戴きます。わたくしは、女史の親密さのみならず、女史の助力を受けての活動にも、大いに期待をかけております。

こちらの学校⁵¹におきまして、わたくし共は3名〔の人員〕を必要としておりますので、伝道団は多分、女史がわたくし共と一緒に留まれることを、あの方にとって最善のこととお思ひ下さることでしょう。学校のことにつきましては、タルカット女史が詳しくお書きになると存じております⁵²。それ故わたくしは、わたくし共がこれに大層打ちこんでおりますこと、それから、寄宿生の数が少ないとは申せ⁵³、開校は尚早ではなかったと思っておりますことを申し上げるだけにいたしましょう。タルカット女史は学校の特別の責任⁵⁴をお引き受けになりました。わたくしは、必要な場合は午後に手伝いをいたしますが、家政管理の分野を受け持ちました⁵⁵。家族は17名でございましたが、わたくしはその世話をとりたてて煩わしいとは思いませんでした。家内の仕事以外には、わたくしは直接的伝道活動の大部分を兵庫で行ないました⁵⁶が、これは、タルカット女史、ギュリック女史⁵⁷、宣教師夫人⁵⁸の皆様、それにこの伝道区の有為な日本婦人クリスチャンたちのお蔭と思っております。兵庫は、御存知のように、かなり骨の折れる地域でございまして、わたくしはしばしば、出かけて行きましたのがまるで甲斐がなかったような心地で、訪問から帰ったものでございます。けれども、こちらでかくも顕著にお働きの聖霊は、あちらでもやはり感得されつつあります。わたくし共の仲間たちは増加してきておりまして、しばしば100人以上の出席がございます。わたくし共の日曜学校の仲間たちは50人かそれ以上でございます。わたくしは主日の朝に青年のクラスを一つ、午後に婦人の聖書クラスを一つ受け持っております。両方共、只今特別に興味深い状態にございます。どちらのクラスも10名を数えますが、婦人のクラスはたちまちのうちに増えるでしょうと存じます。この婦人たちは、キリストを知るにつれて、他の同胞たちのために、わたくし共外国人たちよりもずっと多くのことを為し得ようということがわかります。当地でのわたくし共の活動がだらだらしたものとは思っておりません。現在わたくし共は、かつては日本人としても不品行でありました一人の男の方の家で、祈禱会を開いております。この人がそれを懇願いたしまして、わたくし共は、彼を拒んではいけないのではないかと思うに至ったものでございました。わたくし共の最初の集会に出席いたしましたのは21人。そしてわたくし共は今夜再び集会いたしま

す。こうして、まさしく、当地での活動が始まったのでございます！ これは、住民が神戸のような流動的集団ではございません当地⁵⁹におきましては、偉大なことであると信じております。

わたくしは幾度か、神戸から鉄道沿いに18マイルの所にあります町で人口1万の尼崎に出向いております⁶⁰。わたくし共の〔もとに在ります〕青年たちが活動を開始し、多数が出かけて行きました。けれども、苦情が出てまいりました。これを克服できるのはベリー博士⁶¹お一人で、博士が、月一回の御出張を、再び門戸が開かれる時には果たそうとお約束なされたことによって〔乗りこえられたの〕でした⁶²。

三田は、おそらくわたくしの最初の活動の場でありましたせいで⁶³ わたくしの最愛の地域でございしますが、全くほっておかれましたのに、なお雄々しく持ちこたえております⁶⁴。わたくしは、折にふれて彼らに書簡を送り、また、家を離れることができます限りしばしば会いに参ります。教会員は23名でございします。当地神戸での活動は、ますます関心をそそるものとなつてきております。30名が次の聖餐式に洗礼を志願いたしました⁶⁵。そのうちの大方は信望の厚い人びとで、またほとんど全ての人が、教会員になるにつきましての適性を十二分に証しております。

わたくし共は皆、伝道会が、働き人の召し出しのために、わたくし共の希望以上によくお応え下さると感じております。そしてわたくし共、自分たちの活動の成果が皆様の御期待に背かぬようにと願っております。皆様が日本に大いなる事共をお求めなさいますのは御尤もでございますから。わたくし共はかなり婦人宣教師⁶⁶の働き人に恵まれていると存じます。けれども、まだ余地がございします。わたくしは、もし当地で御用がなくなりましたら、京都に参りたいと存じます。あちらでは広汎な地域が待ち受けております⁶⁷。もっとも、おそらくはスタークウェザー女史⁶⁸がそちらにおいでになりましょうし、タルカット女史とわたくしとは、当面、こちらでのわたくし共の仕事を離れることはできまいと感じております。わたくしが〔タルカット〕女史との協働を大いに享受しておりますことは、申し上げるまでもございしません。このような長々しい便り、お赦し下さいませ。

敬具〔真に衷心から〕⁶⁹

J. E. ダッドレー

—本部着 4月26日—

1877年1月1日

クラーク博士様⁷⁰

新しき年の朝、「よきお年を」とお祈り申し上げますことをお許し下さいませ⁷¹。

わたくし共、当地におきまして、実に尤も至極なことなのでございますが、すぎた日々についての満足と感謝、また、新しき年に期待しての確信と喜びを持っております。他の方々を通じて御存知かと存じますが、わたくしは、昨年、8月以来休んでおりました⁷²。当時わたくしは、自分がひどく疲れており、軽い咳と肺の痛みになんとも煩悩を被っていることを自覚いたしました。ベリー博士は有馬におでかけで、アダムズ博士⁷³が病状を「……」⁷⁴して下さいましたので、続けて博士をお願いしております。博士はわたくしには休養が必要であると主張なさいますので、それを確保いたしますために、ほとんど常時神戸を離れておりました。わたくしは快方に向かっております。けれども気候が望ましくございせんから、仮に一時的にもせよもっと良い土地に転地することが叶いませんのなら、重々大事をとらねばならないという気がいたします。わたくしはこれについて思案いたしかねております。そして、あと数週間もすればわたくしの愛する活動にすっかり復帰させていただけることでしょうと大いに期待しつつ、こちらでのお指図に何でも喜んで服しております。

わたくしはラーネド氏⁷⁵御夫妻のお宅に御厄介になりまして、長い時間戸外ですごしておりますが、このすばらしい都の奇観を探し歩きますのが外出の動機となっております。

この都は、皇后様が当地に行幸中で、陛下のミカドも間もなく当地におなりになると申しまして⁷⁶、常になく華やいでおります。わたくしは皇后様の馬車をよく見かけました。もっとも皇族がお乗りの際はカーテンが降りておりますので、わたくし共、あの方の顔を見ることは決してできません。

先生は活動について精通していらっしゃるようですが、これは、ただに絶妙でございますね！
[もっとも]人間のせいではなくて、神御自身のことですけれども。

これほど多くの同志たちが活動に就いておりますのを目にいたしますと、「……」⁷⁷より大いなる満足を感じさせられます。

このような真剣な仲間たち、この学校⁷⁸に集^{つど}っておりますような無私の青年たちは、伝道ということの大義を愛する全ての方々をお喜ばせることでしょう。間もなくこの人びとのことがお耳に達しましょう。只今は休暇中で、多くの者が二人ずつ〔組になって〕近隣の町々に遣わされております。

タルカット女史は先週暫時当地でお過ごしになりました。わたくし共⁷⁹の学校は、大いなる善の機関たるべきものと存じますが、順調に運んでおります。来学期は26名の寄宿生を擁して開講いたすことと存じます。この学校は、学校と申しますよりも、家族のように見えます。わたくし共は忽ちのうちに少女達を愛するようになりまして、この一人びとりがクリスチャンになるようにと願い、また期待しております。タルカット女史とわたくしは共に、近々、現在の

建物に教室を増築せねばならぬ時が来ることと思っております⁸⁰。それは、より多数の生徒を収容できるような部屋を作りますか、あるいは、現在の、教室が余りにも小さいことによる不便を軽減することになりますか〔——いずれかになりましょう〕。これはまだ伝道団の議題となっておりません。わたくし共の計画は、できるだけ少ない経費で簡素な日本風家屋を建てるということになりましょう。

先週伝道団が婦人宣教師の増員をお願いしようと決議されましたか⁸¹。嬉しいことでございます！ わたくし共はこういう方々を求めています。もしもクリスチャンの婦人方にこの活動から生じる喜びがおわかりになりましたら、皆様は志願者たちにとりかこまれておしまいになることでしょう。世界中に、わたくし共が守っております持ち場ほど望ましい所がありますか、思いつくことができません……。

わたくしはここで、これらの婦人宣教師方のうち何人かが特に学校活動のために指定されますようにと申し上げてよろしいでしょうか。これは御地でも充分御理解いただけます。わたくしは、現場にあります8名の婦人宣教師たち⁸²のうち一人として、婦人たちの間での活動の方を好まない^{かた}方はないということを聞き知っております。もちろん、わたくし共の誰もが、あてがわれた事は何でも、自発的に喜んでいたしますことでしょう。けれども、当地におきまして最も上首尾の教師でありますには、特別の賜と教師としての多少の経験と学校活動に対する愛とを必要といたします。タルカット女史はそのお立場で成功していらっしゃいます。けれどもわたくしは失敗してしまったと思っております⁸³。

わたくしは先週兵庫教会の一婦人の訪問を受けました（わたくしに会い、活動の様子を知らせようと、60マイル〔道のり〕をやって来てくれたのでございます）。この方は、クリスチャンの家庭内での、あるいは近隣の人びとの間での進歩——それは、予期していたほど迅速ではございませんが、まさしくわたくし共の望んでおります方向に向かっております——を伝えてきております。皆は自分たちの代理牧師村上さん⁸⁴に好意をもち、この方がすぐにも自分たちの間に住みついて下さるよう期待しております。

わたくしの所には、四国出身の先生がおいでです。松山の人で、昨春アッキンソン氏を聴聞いたしました⁸⁵。この方は世帯持ちですが、家族を残して〔来て〕おりまして、目下、妻子を早く呼び寄せたいと言いながら、三年間の課程をとることを企てておいでです。この方は、毎日、松山に来るようとわたくしを誘います。そして聖書のことしか勉強いたしません。わたくしは、春には松山に行きたいと思っております。このような土地がいくつか待ち受けておりまして、わたくしは、まさにかかる活動を為しますために、力と時間とを切望しております。神が、まさにかかる男女を、当地におきましてお望みのままに駆け立て給いますように、そして、諸教会が、世界中の活動のために寛大に寄与せずにはすませなくなりますように、また、この来るべき年、聖霊が、わたくし共と共に在し給いますように、切に祈りつつ。

敬具〔真心をこめて〕⁸⁶

ジュリア・E. ダッドレー

—本部着2月7日—

註

1. これは、婦人宣教師たちが、それぞれの直接母体である在米婦人伝道会に対しても活動の報告を行なっていることに鑑みて、首肯し得ることではある。事実、こちらの機関の月刊誌 L.L. には、より頻繁に、活動報告の抄出が紹介されている。
2. Julia E. Dudley (1840—1906. 前出：「論集」XXIV-3, p. 96.). タルカット女史と共に、米国伝道会によって日本に派遣された独身婦人宣教師。来日1873年。タルカット女史と共に神戸にあって、近隣の日本婦人のための伝道に、また神戸女学院の前身である神戸諏訪山の女学校の創設・運営に協力。1880年秋タルカット女史の転任と時を同じくして女学校を去ってのちも、神戸を中心に広く伝道活動に携わり、1900年帰米。聖和大学の前身である神戸女子神学校の創立も女史の業績である。略伝は、『天上の友』(pp. 145—148.) にも収められている。
3. ダッドレー女史の米国伝道団宛ての第一信である。この書簡は筆跡の薄れが甚しく非常に判読しにくいものであった。人名その他、なお検討の余地のある箇所が少なくない。
4. この書簡では、女学校の正式開校(1875年10月12日)からすでに1年2箇月余が過ぎ、校舎の増築の必要が話題にのぼるに至っている。ダッドレー女史自身は健康を害しており、学校業務に自信を喪っている感があるが、婦人伝道に対する熱意は衰えるものではなかった。
5. ダッドレー女史の米国伝道会宛ての第一信で、米国立出前に書かれたものである。
6. Elgin とある。
7. 米国伝道会の Corresponding Secretaries の一人、Nathaniel George Clark (1825—1896. 前出：「論集」XXIV-3, p. 95.) に宛てたものであるが、筆勢の具合か Clarke に見える。
8. Dear Sir を仮にこのように訳した。但しダッドレー女史にあっては、この頭書に当たる呼びかけは、全便を通して必ずしも一定していない。
9. Mrs. Blatchford とある。当時、the Woman's Board of Missions of the Interior の Secretary を勤めていた Mrs. E.W. Blatchford のことであろう。
10. シカゴには、the Woman's Board of Missions of the Interior の本部があり、イリノイ出身のダッドレー女史は、この伝道団を通じて、日本派遣の実現を見た。
11. Mr. Hamphy とある。
12. Mrs. Edwards とある。
13. sufferance のように見えるが、前後の関係から敢えて reference と解読する。
14. Bro. 一。一。Clarke とあるが、Clarke の前の二つの頭文字は、特に文字のかすれが甚しく、判読が困難である。
15. 判読困難。Giezentanner 女史は accede とするが、画数、形態共にかなりの無理を感じさせる。
16. Sincerely Yours とある。
17. 欄外に記された返信の日附のメモであるが、走り書きのため判読不能である。
18. Yankton, Dakota とある。
19. タルカット、ダッドレー両女史の日本到着は切支丹禁制の高札撤去(1873年2月24日)のわずか一箇月余りのちのことであった(M.H., 1873, August, p. 269.) が、本便はその高札撤去の直前に米国で書かれたものである。すでにタルカット女史が、伝道会本部を通じて、ヘボン博士(James Curtis Hepburn)の手紙に目を通して(タルカット書簡1872年12月13日附。—「論集」XXIV-3, p. 76.) ことから見ても、タルカット女史よりも神戸の伝道団に知己のあったダッドレー女史(デイヴィス書簡1872年4月12日附参照)が、当時の日本における伝道の実情に全うとかったとは考えられない。しかしダッドレー女史は、本便後段に見られるように、地上の小暗い土地にキリストの到来を願う人々の祈りを身に受けて、勇躍、未知の世界に旅立とうとしている。

一方、おそらくその出発以前に女史の目に触れることはなかったであろうが、1872年12月16日附及び1873年2月17日附で、神戸在住のグリーン(Daniel Crosby Greene)は、市川榮之助・まつ夫妻の受難の顛末を報じてきていた(「D.C. グリーンの手紙」—梅花短期大学紀要、第21号、p. 63 及び p. 66. これは A.R., 1872, p. 68 及び M.H., 1873, April, pp. 125—126. にも紹介されて

いる。また、「論集」XXIV-3, p. 99, 参照)。高札の撤去についても、これが日本における信教の自由の全き保証でなかったことはすでに見たとおりである（「論集」XXIV-3, pp. 104—105.）。また、1873年4月18日附ベリー書簡は、有馬のような「奥地」では、なお高札が手つかずのまま保持されていることを報じている。

20. Dear Brother Clark となっている。
21. Mr. Hoyt of the Episcopal Board (a family) とある。
22. Chicago Theological Seminary のことであろうか。デイヴィスは、1866年秋より3年間このセミナリーに学んでいる。
23. Jerome Dean Davis (1838—1913. 前出:「論集」XXIV-3, p. 97.)。1871年の来日以来神戸に在った米国伝道会宣教師。のち京都に移る。
24. Mr. Riggs and son of Dakota mission とある。リグス家は当時ダコタにおいて伝道活動に従事しており、L.L. にもその消息が散見される。
25. Eliza Talcott (1836—1911). ダッドレー女史と共に、米国伝道会によって日本に派遣された婦人宣教師。「論集」XXIV-3 及び XXV-3 に、同女史の米国伝道会宛書簡（1872年12月3日附—1880年7月5日附）計17通の訳および註を納める。

なお『神戸女学院百年史 各論』中の高道 基「タルカット女史正伝のための試み」は、同女史に関する最新の著述である。

26. Very truly yours とある。
27. ダッドレー女史の日本からの第一信である。ダッドレー女史がタルカット女史と共に日本に向かってサンフランシスコを出港したのは1878年3月1日（M.H., 1873, April, p. 133.）、神戸到着は同年3月31日（ibid., August, p. 269.）であるから、女史は赴任後1年3箇月近くの月日を無音のままに過ごしたことになる。本文中の冒頭の部分が、このことに関する女史自身の述懐である。
28. ここでは Dear Brother との呼びかけが用いられている。
29. 手稿は *familliar*.
30. この章句がダッドレー女史の人柄を感じさせて興味深いということは、故鈴木教授も早くから指摘するところであった。人が異質の文化圏に踏みこんだ場合、目に映る風物の特異さに対する感慨はさることながら、それらに伴う物音や匂いを閑却し得るものではないはずであるが、とかく簡略な叙述においてこちらの面を明確に意識させるものは少ない。ここで、「光景」のみならず「物音」にも言及することにより、新しい環境の諸事象をダッドレー女史が全身で受けとめている様が、如実に察知されることになる。
31. Some one says in writing [……] polite, kind and gentle people…… と書かれている。[……] の部分はページの変り目にかかって綴じこまれ、裏から透かして判読するしかないが、それによれば、*them they are the most* と見える。
32. j で始まる言葉のようにも見えるが、Giezantanner 女史は *quicken* と解説。とりあえずこれに従って読むこととする。
33. 同年5月16日附のタルカット女史の手紙には「24名の婦女子を擁するわたくし共の学校」とある（「論集」XXIV-3, p. 81.）。明治6年（1873）10月に花隈村前田兵藏方に開かれた私塾のことであるが、1874年の4月以降、すなわちこの書簡の書かれた頃には、その教場は白洲退蔵の家に移っている（ibid., p. 98.）。
34. 註31と同様の事情であるが、ここでは行の初めの *the* 以外は識別することができない。
35. 前記タルカット書簡にも同様の言及がある（ibid., p. 81.）。
36. 手稿には *difference* と見えるが、Giezantanner 女史と共に *diference* と解する。
37. この「ホーム」という言葉は、次にも触れるところであるが、タルカット女史言うところの「寄宿学校（Boarding School）」と同義で用いられている。
38. タルカット女史はこれより1箇月前、1874年5月16日附の書簡において、「寄宿学校の開設」を希望する旨述べている（「論集」XXIV-3, p. 83.）が、更にこの年の12月1日附の書簡では、「ガ

ールズ・ホームを建てるためのお許しを待っております」と書き送っており (ibid., p. 84.), およそ半年の間に学校の運営について具体的な構想の練られていることを窺わせる。

39. タルカット, ダッドレー両女史は神戸に到着してより, デイヴィス家に寄寓していた (タルカット書簡1873年4月12日附, 同6月16日附「論集」XXIV-3, pp. 78 & 79.)。
40. タルカット書簡の項でも触れていることである (1874年5月16日附書簡及びその註38—「論集」XXIV-3, p. 82, p. 100.) が, A.R., M.H. 共随所にダッドレー女史の尽力について言及しており, なかでも M.H., 1875, September は, 特に HIOGO AND SANDA—MISS DUDLEY なる項を設け (pp. 265—266.), 女史の活躍ぶりを紹介している。1981年3月刊行の『神戸女学院百年史 各論』pp. 38—44も参照。
41. 前掲タルカット書簡にも the daimio's mother とある。一般には旧三田藩主九鬼隆義の夫人との親交が伝えられており, C.B. DeForest 女史は *The History of Kobe College* において同じ事柄を wife of ex-daimyo のこととして述べている (p. 2.)。
42. 出典はローマ人への手紙第14章11節。".....for it is written, 'As I live, say the Lord, every knee shall bow to me, and every tongue shall give praise to God.'....." から採られている。
43.souls drawn big together と見えるが, 他方, big は by に, together は to them にとれないこともない。
44. 1875年10月12日に開校の運びにいたる寄宿学校のことであろう。
45. 本稿註36, 37. と関連。また *The History of Kobe College* には1874年5月の伝道団決議として, 神戸と大阪に "Home" を開くべきこと, これはやがて Boarding School に伸展させられるべきことが記されている (p. 4.)。但し, その建築の事に関しては同書 pp. 4—6. 参照。
46. surely 又は sanely.
47. Giezentanner 女史は hundreds would besiege と解説したが, この二番目の語は, 形の上ではむしろ souls に近い。
48. Yours very truly とある。
49. いきなり Dear Dr. Clark と書き出している。
50. Miss B- とある。Miss Martha J. Barrows (1841—1925. 前出:「論集」XXV-3, pp. 148—149.) のことである。バロウズ女史来日前後の書簡は追って発表する予定であるが, 来日のことに関してバロウズ女史は, その召命の妥当性について思いめぐらして逡巡しつつも, すでに前年の9月20日附書簡において, クラーク博士に宛て, 次のように告白している。「しかしながら, 過去1, 2年, 日本におけるこの仕事のことにつきまして, しばしばダッドレー女史から伺うようになりましてからというもの, わたくしの思いは, この仕事に参加したいという思いで一杯になっておりました。」そして二箇月後の11月15日には次のように認めている。「神と友人たちと相談の結果, こう申し上げる用意ができました。『お遣わし下さるなら, 参りましょう』と。」かくて1876年3月1日サンフランシスコを出港し (M.H., 1876, April, p. 141.) 来日, 1924年に帰米するまで, 神戸にあって伝道に従事した。

タルカット女史は1876年10月18日附の書簡において, この年, タルカット, ダッドレー両女史が健康を害したこともあり, バロウズ女史の来日を「神慮によること」であったと感謝している (「論集」XXV-3, p. 131.)。
51. すでに前年 (1875年) 10月12日に, タルカット, ダッドレー両女史は, 神戸に, 独立の建物 (のちに「南舎」と称される) を備えた寄宿学校を開いた。このことは1876年の年次報告にアッキンソン (J.L. Atkinson, 1842—1908. 前出:「論集」XXIV-3, p. 98.) により紹介されている (A. R., 1876, p. 75.) が, この件についての開校当事者自身による言及は, ダッドレー女史のこの書簡が最初である (「論集」XXV-3, p. 147. 参照)。
52. タルカット女史は開校1年後の1876年10月18日附の書簡において, 長い無音を詫びながらも, 「わたくし共は, わたくし共のホームの写真をお送りして, 多少は御希望におこたえ申し上げたつもりでございましたが, これはお手元に届かなかったのではありますまいか」と記し (「論集」XXV-3, p. 129.), 一層即時的な開校報告が, 本部に不着のまま終わっただけであることを暗示して

いる。

53. 寄宿生の数は、A.R. によれば、1874、75年両年は、在校生34名中10名となっている（A.R., 1875, p.59. 同, 1876, p.75.）。
54. special charge.
55. これは、1874年12月1日附のタルカット女史の記述に対応する（『論集』XXIV-3, p.84.）。
56. 兵庫伝道に関しては、すでに紹介した、M.H., 1875, September のHIOGO AND SANDA—MISS DUDLEY の項参照。なお、この兵庫という土地が、どれほどキリスト教伝道にとって至難の地域であったかについては、本便においてダッドレー女史も後述するところであるが、教会設立後の1876年8月19日、アッキンソンは追懐して言う。「我々はよく、『兵庫は日本全土において最もやりにくい所である』と言ったものであります。『それで、もしこの土地に足場を得さえすれば、我々は、この帝国内のどこにおいても、足場を得ることが出来るかどうかを懸念するには及ばなくなる』と。」（M.H., 1876, November, p.378.）しかし、教会設立直前の1876年7月19日、ダッドレー女史は次のように書いた。「昨冬、わたくし共は、ここ〔兵庫〕に蒔かれた種はきっと駄目になってしまったことであろうと考えました。この土地は、それほど不毛に、それほど頑なに見えました。〔けれども〕兵庫は、バラのように花咲きはじめております。」（L.L., 1876, November, p.343.）
兵庫における伝道所の開設については A.R., 1875, p.58. 参照。そして A.R., 1876, p.78. は、「7月」に教会が組織されたと告げているが、この「7月」は誤記である。教会設立は明治9年（1876）8月6日のことで、同年8月11日附「七一雑報」にその報道が見られる。また、同年8月7日附でバロウズ女史はクラーク博士宛てに、「昨日…夕刻、兵庫教会の創立に列席するという栄誉に与りました。当地での活動が始まりましてから、1年足らずでございます。16名の会員のうち3名は神戸教会から転入して参りました。のこりの女子10名男子3名が受洗いたしました。それは感動的な光景でございました。」と報告している。なお、教会員に婦人が優勢であることにつき、アッキンソンは、「ダッドレー女史、おふじ、私の家内」の尽力に負うと述べ、とりわけダッドレー女史の献身に言い及んでいる（M.H., 1877, February, p.51.）。
57. Julia A. Gulick, 前出：『論集』XXIV-3, p.101.
58. The married ladiesとある。独身婦人宣教師に対し、既婚婦人宣教師と訳すべきか。
59. この土地の人情風土については『神戸開港三十年史』にも記されているところであるが、『日本組合基督教會史』の、「…神戸は進歩的にして兵庫は保守的である。前者の住民は新來者で、後者の住民は土着人である。」という記事（p.31.）は、本便の表現に対応するものであろう。
60. 『日本組合基督教會史』には、「尼ヶ崎教會はもと浪華教會から傳道したもので、〔明治〕二十九年十月に設立せられた」とある（p.139.）が、その伝道の端緒については、M.H. 1876年の記事をもって見るのが至当であると思われる。即ち、同書3月の項にはアッキンソンの報告（前年11月末に書かれている）として、ダッドレー女史が「おふみさん」と尼崎に出かけて行ったことが紹介され（M.H., March, pp.81—82. — これは A.R., 1876, p.79. の記事と対応する。）、また4月の項には同じく前年12月23日附のデイヴィスの便りとして、「一年半ほど前に一人の宣教師が日本人の助手と出かけた時には、説教の場所もなく訪れる人もなかったが、今は週毎の集會が催されている」ことが明らかにされている（M.H., April, p.129.）。
61. John Cutting Berry (1847—1936). 前出：『論集』XXIV-3, p.101.
62. 「苦情」が出た——とは、民間にいささかの恐れや不信のあったことによるらしい（M.H., 1875, September, p.265.）が、ベリー博士がこれを克服したという点に関しては、A.R., 1875, p.60. をもって援引とする。即ち、「神戸病院の日本人医師との連携により、大阪に近い尼崎の町への医療訪問が何度か行なわれた。4月の初めから、該地に定例の礼拝式を始めることができるよう期待されていたが、これは運悪く為政者によって延期させられた。しかしながら多数の住民がこれを望んでいる。遠からず診療所を通じて該地に礼拝式を持ち得ようという望みは、充分にある」（A.R., 1875, p.60.）。

また、これに先立つ1874年の年次総会の報告の中には、すでに、ベリー博士の医療活動が直接

- 伝道場の拓くのに大いに役立っていることが述べられている (M.H., 1874, November, p.350.)。
63. 本稿, 1874年6月20日附信, 及びその註32参照。
 64. 1876年前半の頃の三田教会の状況について A.R. は, 会員が27名にふえたこと, 礼拝所の家賃や設備費を自給していること, 神戸教会の会員の助力で, 近隣の村に二つの定例説教集会を維持していることを報じている (A.R., 1876, p.78.)。これは「七一雑報」明治9年5月5日附紙上にも紹介されていることであるが, 同紙はまた9月14日附で, 「全たく三田公會の盡力よりいずるもの」として9月7日に新会堂の「開業式」が行われたことも伝えている。
 65. 明治9年5月5日附「七一雑報」には, 4月30日に「神戸元町の會堂にて洗禮をうけました人が男と女と十九人, 子供も合せて貳十三人ありました」とある。
 66. women ではなく ladies. この lady なる言葉は伝道団のメンバーに限り用いられている。
 67. 京都における伝道活動については, 1876年7月7日附「七一雑報」に, 「近頃西京には眞の神の道を講釈する家が四ヶ所にあつて……デベス氏, ドン氏, ロネット氏, 新島氏が」これに当たっている旨, 報じられている。また, L.L., 1876, October, p.309. のスタークウェザー女史の報告参照。但しこの報告の発信年月日が1874年5月10日となっているのは, 1876年の誤記と思われる。スタークウェザー女史は1876年3月1日, バロウズ女史と共にサンフランシスコを發つて来日したものである (M.H., 1876, April, p.141.)。
- なお, 1876年11月20日附のデイヴィス書簡は, 「京都ホーム」なる女子寄宿学校について報じ (L.L., 1877, March, p.69.), 更に, 1877年の A.R. は, 「京都に女学校が開校され, 婦人を対象とする教育と伝道との大いなる活動のために, 婦人宣教師を求めている」ことを伝えているが, これは, 京都の伝道活動が従来男子の手に委され男子向きに傾きがちであったことを指摘したデイヴィスの所感 (同年2月2日附書簡—M.H., 1877, June, p.180.) に対応する事柄であると言えよう。これに先立つこと1年, ダッドレー女史の目は, すでに, この未開の領域に向けられていたのであった。
68. Alice J. Starkweather. 前出:「論集」XXV-3, p.149.
 69. Yours very truly とある。
 70. Dear Dr. Clarke と読める。
 71. 簡単に「新年おめでとうございます」とすることもできようが, 手稿には, “Allow me this morning of the new Year to wish you a ‘Happy New Year.’” とある。
 72. タルカット女史の書簡によれば, ダッドレー女史は肺の充血で倒れ, 1876年10月現在, なお, 京都の比叡山で静養中であった (1876年10月18日附—「論集」XXV-3, p.131 及び p.134.) が, 翌年2月には神戸に戻った (1877年2月6日附—ibid., p.137.) ことが知られる。
 73. Arthur H. Adams (1847—1879). 米国伝道会日本派遣医療宣教師。1874年, 新島 襄, J.H. デフォレスト夫妻と共に来日。1879年病歿, 神戸に葬られる。伝道会本部宛てデフォレスト書簡にしばしば言及が見られるが, アダムズの訃報に接した折りの書簡 (1879年12月10日附) は印象深い。略伝は『天上之友』にも収められている (pp.133—134.)。
 74. Giezentanner 女史は undertook と判読。但しつづりの前半にかなりの無理がある。
 75. Dwight W. Learned (1848—1943). 前出:「論集」XXV-3, p.149.
 76. 「七一雑報」(明治9年10月27日附)には, 11月10日に「皇后宮が西京に行啓」との記事が見られる。また同12月8日附紙上には, 「主上は朋年の一月十四日にいよいよ東京御發轅横濱より御艦にて神戸へ御着港夫より御入京に相なるよし, 又神戸より西京までの鉄道線の開業式をも執行なはると云ふ」とある。但し, 実際に「神戸港へ御着艦」となったのは1月28日のことであったという (同紙明治10年2月2日附)。
 77. to be にひきいられる一語が判読不能である。Giezentanner 女史によれば unused となるが, 形態はなお判然としない。
 78. 新島 襄創設になる同志社のことであろう。休暇を利用しての同志社学生の地域伝道は, 「毎日夕刻又は金曜土曜日曜の三日間, 市内各所に出張して 斯教を宣傳した」(『日本 組合基督教會史』p.41.—A.R., 1877, p.63; 1876年12月のデイヴィスの報告に基づく) のに始まり, やがて明治

10年（1877）夏には「夏期休暇を利用し各地に傳道に出張し」「其の地方は上州・尾州・勢州・江州・越前・越後・丹波・大和・備前・備中・備後等」に及んだ（*ibid.*, p. 48.）という。また、「七一雜報」明治10年8月3日附も参照。

79. 神戸の女學校のことである。
80. タルカット女史も、1876年10月18日附及び1877年2月6日附の手紙で、「わたくし共の家はもうせまくなり」「満員で」と述べ（『論集』XXV-3, p. 130及び p. 136.），1877年8月7日附の書簡はその新館の構想を開陳するに至っている（*ibid.*, pp. 138—139.）。
また A.R., 1877, p. 66. には、神戸の “girls' seminary building” が拡張の必要に迫られていることが報じられているが、これは同年6月の M.H. 誌上に紹介されたペリーの報告（p. 179.）と同趣である。「論集」XXV-3 の註46参照。
81. 1976年12月28日、大阪において、米国伝道会日本伝道団の会合が行なわれている。
82. 当時神戸に在った婦人宣教師たちは、Miss M. Barrows, Miss J.E. Dudley, Miss J. Gulick, Miss E. Talcott, Mrs. C.F. Atkinson, Mrs. M.E. Berry, Mrs. A.E. Gulick, Mrs. S.M. Jencks である。
83. ダッドレー女史が自分の資質を学校業務に不向きであると考え始めた時点は定かではないが、1877年2月、タルカット女史は「あの方は外での活動を望んでいらっしゃいます」と述べ（『論集』XXV-3, p. 137.），さらに8月には、ダッドレー女史の回復を告げながら、「もっともあの方は、もう一度学校に入ろうとはなさいますまい」と記している（*ibid.*, p. 141.）。また同年11月6日にはバロウズ女史も、ダッドレー女史が「学校業務に戻るの是最善ではない」旨言及するに至る。これは専らダッドレー女史の健康状態を考慮した発言であると解されるが、ダッドレー女史自身はなお次便（1878年2月14日附。——次稿にて取り扱う）において、「アダムズ博士は……わたくしが学校に戻るのには不本意であるとおっしゃいました。わたくしはいつもそのことで疲れ果てておりましたから。そしてわたくしは、学校業務の束縛に耐えることができませんでした」と告白している。
84. 村上俊吉（1846—1906）。明治10年（1877）11月24日兵庫教会にて按手礼を受け牧師に就任（『七一雜報』明治10年11月30日附参照。）。略伝は『天上之友』第二篇（pp. 1—8.）に収められている。
85. 松山伝道の詳細は、アッキンソン自身の記事として、M.H., 1876, August, pp. 250—255. に掲載されている。また、アッキンソンが松山に入ったのは明治9年（1876）3月28日のことで、「約十日間毎日二回ずつ説教をしたが、聴衆の數後には三百五六十名に上った」（『日本組合基督教會史』pp. 46—47.）というが、これは A.R., 1876, pp. 80—81. の報告に依拠したものと思われる。ほかに、「七一雜報」明治9年4月14日附紙上の鈴木 清の文も参照できる。「論集」XXV-3, p. 152, 註57と関連。
86. I am very sincerely yours. とある。

参 考 文 献

A. B. C. F. M. 宣教師文書

訳文：茂 義樹「D. C. グリーンの手紙」——梅花短期大学紀要 第21号～第25号（1972～1976.）

Manuscripts: Letters of Miss J. E. Dudley (1872-1880)

Letters of Miss E. Talcott (1872-1880)

Letters of Miss M. Barrows (1875-1880)

Letters of Dr. J. C. Berry (1871-1873)

Letters of J. D. Davis (1871-1873)

Letters of J. H. De Forest (1874-1880)

解説：川村大膳「アメリカン・ボード日本布教報告書の研究」——関西学院大学史学第5号（1959），
および関西学院大学共同研究紀要Ⅰ『明治研究』（昭和42年3月）。

Annual Report of the A. B. C. F. M.

Missionary Herald.

Woman's Board of Missions; Life and Light for Woman.

Missions News.

七一雑報（神戸雑報社，明治8年創刊）

神戸開港三十年史・乾・坤（神戸市役所編，明治31年）

神戸教會月報（明治32年創刊，復刻・日本基督教団神戸教会，1975）

日本組合基督教會教師會編『天上之友』（大正4年）

神戸教會略史（神戸基督教會，大正13年）

小崎弘道編『日本組合基督教會史』（日本組合基督教會本部，大正13年）

日本組合基督教會教師會編『天上之友』第二篇（昭和8年）

Berry, Catherine, *A Pioneer Doctor in Old Japan*. (New York, 1940)

DeForest, Charlotte B., *The History of Kobe College*. (神戸女学院, 1950)

神戸女学院八十年史（神戸女学院，昭和30年）

小澤三郎『日本プロテスタント史研究』（東海大学出版会，1964）

三田市史，下巻（三田市役所，昭和40年）

海老沢有道 共著『日本基督教史』（日本基督教団出版局，1970）
大内三郎

小澤三郎『幕末明治耶蘇教研究』（日本基督教団出版局，1973）

日本基督教協議会文書事業部
キリスト教大事典編集委員会『キリスト教大事典』（教文館，昭和50年）

神戸女学院百年史 総説（神戸女学院，1976）

神戸女学院百年史 各論（神戸女学院，1981）

原稿受理 1981年11月30日